宗祇

小西甚一

日本詩人選 16

筑摩書房

小西甚一（こにし・じんいち）

俳人・東京教育大学教授。大正四年三重生。東京文理科大学国文科卒。著書「梁塵秘抄考」「文鏡秘府論考」ほか。

日本詩人選16　宗祇

昭和四十六年十二月二十日第一刷発行
昭和五十一年八月三十日第六刷発行

著者　小西甚一

発行者　井上達三

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三番郵便番号一〇一―九一

印刷　明和印刷　製本　鈴木製本

©一九七一　小西甚一

（分類）1392（製品）13216（出版社）4604

目次

Ⅰ　宗　祇

一　宗祇の虚像と実像　九

（一）時雨の宿りと草庵ぐらし　九

（二）旅の宗祇　一三

（三）種玉庵の宗祇　二四

二　宗祇と古典主義　二九

（一）古典学者宗祇　二九

（二）古典主義と「今の代」　三八

三　宗祇の連歌　四五

（一）連歌師宗祇　四五

（二）宗祇風の成立　五〇

（三）宗祇と山吹の花――艶なるもの――　五五

Ⅱ 連歌

一 「座」の芸術——連歌についての問題提起——　六三
二 連衆・座・点者——連歌はなぜ魅力的であったか——　六九
三 連歌法則と楽理——協和と展開のための規制——　七七
四 イメイジの交響楽——非個人性と無機的な感興——　九六
五 定形をもたない秩序——偶然性と関係的統一——　一〇九
六 親句性・疎句性——伸縮性のあるリズムと進度——　一二四
七 「本意」への回帰——協和音から民族意識の深層へ——　一三六

Ⅲ 水無瀬三吟

一 連歌の解釈と批評　一五三
二 『水無瀬三吟』の解説　一五九
1 成立の事情　一六〇

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

2　連衆の状況　一六六
3　テクストと注解　一七一
三　『水無瀬三吟』の評釈　一七七
四　『水無瀬三吟』の句材分析　二三六
連歌の基本法則　二四五
宗祇略年譜　二五五
あとがき　二六三

宗

祇

I

宗

祇

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

一　宗祇の虚像と実像

（一）　時雨の宿りと草庵ぐらし

西行法師の富士見笠か、東坡居士の雪見笠か。宮城野の露に供連れねば、呉天の雪に杖をや曳かむ。霰に誘ひ、時雨に傾け、そぞろに愛でて、殊に興ず。興のうちにして、俄かに感ずることあり。再び宗祇の時雨ならでも、仮の宿りに袂をうるほして、みづから笠の裏に書きつけはべる。

世にふるはさらに宗祇の宿りかな　　（芭蕉『渋笠の銘』）

芭蕉が自分で笠を造り、その裏に書きつけた発句および制作の由来をしるした文章である。これによると、芭蕉は、漂泊の旅を代表する人として宗祇を考え、宗祇と同様な旅に出かける自分を頭に描きながら、右の句を作ったことが明らかである。芭蕉が宗祇の旅と自分の旅とを重ねあわせて考えたことは、右の句に季語が示されていない点からも確認できよう。連歌や俳諧の発句には、季語を欠くことが許されない。それにも拘わらず、芭蕉があえて季語を使わな

かったのは、句の裏に季をひそめたからであり、それと言わなくても、右の句が「時雨」の季感をもつことは、すぐわかるからであった。宗祇の自撰連歌句集『萱草』第四に、

思ふ事はべる頃の会に、同じ心を、

世にふるもさらに時雨の宿りかな

という発句を収める。「同じ心を」は、この句の前に収められた発句の詞書に「時雨を」とあるのを受けたもので、おそらく「時雨」という題をもらったのであろう。この発句は、宗祇としてよほど自信のあった作らしく、第二自撰連歌句集『老葉』（再治本）第十にも同じ詞書と共に収めており、また準勅撰連歌句集『新撰菟玖波集』第二十にも「同じ頃、信濃に下りて、時雨の発句に」という詞書で収められる。「同じ頃」は、そのすぐ前に、

応仁の頃、世の乱れはべりしとき、東に下りて仕うまつりける。

雲はなほ定めある世の時雨かな　　権大僧都心敬

とあるのを受けており、さきの詞書に「思ふ事はべる頃」とあった内容が、応仁の乱のため地

方にさすらう身の歎きなのであろうと推測しても、あまり見当ちがいではあるまい。芭蕉がどのような書物から「世にふるも……」の句を知ったかは不明であるけれど、いずれにしても、芭蕉の頭に描かれた宗祇像は、流離漂泊のわびしい旅人であったらしい。しかも、その果は、旅さきで亡くなるという不遇な境涯であった。『奥の細道』の初頭に、

古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひやまず。

とある「古人」は、主として宗祇をさすものと考えてよろしかろう。このような宗祇像は、現在にいたるまで、多少の振幅をもちながらも、かなり忠実に継承されているのではあるまいか。荒木良雄氏著『宗祇』（昭和十六年一月刊）には、

最も世間的な意味で、宗祇は、旅の詩人であった。宗祇といへば、自然に聯想せられるのは、おそらくその笠着て時雨の頃を行く旅姿であらう。

と述べられている（同書三七一頁）。これは、けっして荒木氏の独断でなく、芭蕉このかた、世人の抱く宗祇像は、ほとんど「笠着て時雨の頃を行く旅姿」を多く出ることがなかったろうと思われる。

もっとも、宗祇は、むやみに旅ばかりしていたわけでなく、ある時期は決まった場所に住んでいたのだが、その場所としては、いつも「草庵」が考えられてきた。江藤保定氏のすぐれた労作『宗祇の研究』（昭和四十二年六月刊）において、まず「総じて中世隠者の文学は草庵から生れた」という前提のもとに、宗祇もその例外でないとし、

宗祇の文学の本質的なものを完全に理解するためには、旅の作品と共に草庵の句がとりあげられねばならない。それは単に彼が草庵生活者であったという外面的理由からのみでない。事実、彼の作品がそれを要請しているからである。

とされているのは（同書二六八頁）、その代表的な見解であろう。氏の指摘は、まさしくそのとおりであって、宗祇の芸術が旅と草庵の生活を通じて形成されたという事実は、何人も否定できないと思われる。

ところで、宗祇の芸術を「旅と草庵」という境涯に結びつけて考えるとき、現代人が頭に描きやすいのは、痩せ衰えた行脚（あんぎゃ）の僧がひとり寂しく歩いてゆく暮れがたの景色や、粗末な仮庵（かりいお）でほそぼそと生きている清貧の隠者でなかろうか。いや、現代人だけでなく、芭蕉が頭に描いた宗祇像も、たぶんその類のものであったろう。さらに推測すれば、宗祇の芸術と生きかたに対してひとつの重要な典型となったはずの西行を宗祇が頭に描いたときも、同じような人物像

が浮かんだのでなかろうか。このような「漂泊の隠者」という人物像が中世の文人なかまでひとつの典型として意識されたことは、おそらく疑いないだろうが、そうした理念としての人物像が、はたして現実の宗祇なり西行なりと同じであるかどうかは、また別の問題だと考えられるのである。

(二) 旅の宗祇

宗祇の体重がフライ級であったかバンタム級であったかは、もちろん不明だけれども、けっして虚弱な体質でなかったことは、乱世のなかでかなり変動の激しい生活をしながら、八十二歳の長寿を保った点から推測できる。しかも、巻末の年譜でわかるとおり、死去の前年あたりまでは、しきりと短期、長期の旅をかさねているのであって、当然、輿その他で無理のない道中をしたのではあろうが、八十歳すぎの老人としては、そうとう健康に恵まれていたはずである。文明十六年、すなわち六十四歳のとき、越後から帰京したあと、旅の疲れか、寝こんでしまったことがある。見舞に出かけた三条西実隆は「病気散々無力之体也」(『実隆公記』同年九月二十六日)としるしているが、翌月二十五日は将軍義尚の連歌会に出席しているから、間もなく回復したのであろう。そのほかには、たいした病気をした形迹がない。

宗祇と同様に旅の詩人とよばれる西行も、頑健な体質だったらしい。西行は七十三歳で亡くなっているが、やはり六十九歳のとき奥州平泉まで旅をした。よほど健康に自信があったのだろう。堀部正二氏の『西行と蹴鞠』（『中古日本文学の研究』〈昭和十八年一月刊〉所収）という論文で明らかになったごとく、西行は鞠の達人であったらしい。当時の蹴鞠は、サッカーなどのような激しい動きをしないけれども、長時間にわたって鞠を地面に落さないよう蹴上げているのだから、持久的な体力の強さを必要とする。貧弱な体格では、とても続かない。西行は、もともと院の北面武士なのだから、体格がすぐれていたことは、むしろ当然であろう。荒法師文覚が、西行という奴は、坊主のくせに仏道修行そこのけで歌など詠み散らしているそうだが、けしからんから、出あい次第に頭をぶち割ってやろう——と意気ごんでいた。ところが、あるとき、法会のため、西行が高尾山へ来た。文覚は、よしきたと、手ぐすね引いて待ち受け、案内があったので、明り障子をさっと開けて、しばらく見ていたが、どうしたぐあいか「さあ、どうぞ」と内へ入れ、懇談し、食事を共にして、機嫌よく別れた。あとで弟子が「どうして無事に帰したのですか」と訊ねたところ、文覚は「あら、いふかひなの法師どもや。あれは文覚に打たれんずる者の面やうか。文覚をこそ打たんずる者なれ」と答えた。以上の話は『井蛙抄』巻六に出ているもので、真偽の程は保証の限りでないけれど、西行が文覚をノックアウトしかねない腕っ節だったとしても、ふしぎではない。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com